

まじかる☆ないと

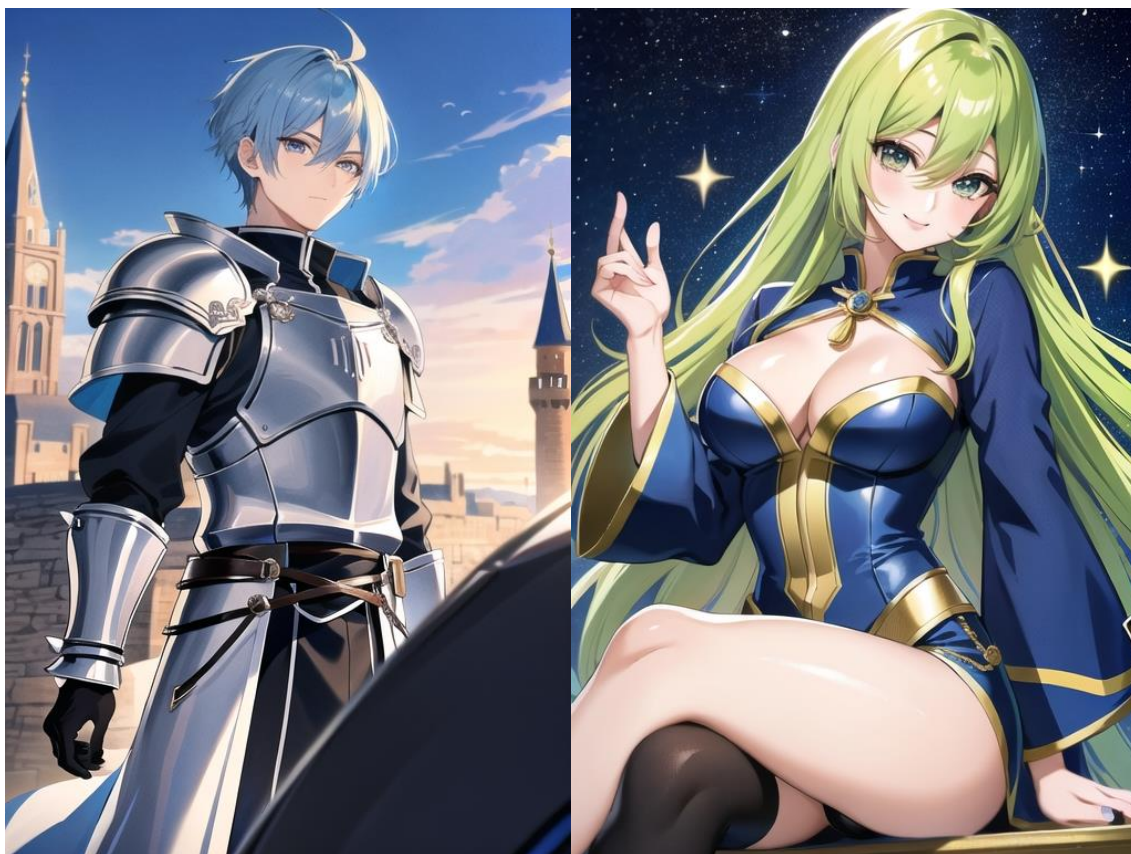
第1部:魔女討伐編

第1章:魔女討伐

タカ:「魔女アイリーンだな？」

アイリーン:「うふっ♥よくあたしを見つけたわね。ステルス魔法を掛けていたのに。」

タカ:「これほどの魔力を発しているんだ。姿を隠そうとしても気配までは消せない。さあ、覚悟してもらうぞ。」



魔女アイリーンはライトグリーンのロングヘアを持つ可愛らしさと美しさを兼ね備えたスタイリッシュな女性だった。その衣装はいかにも魔女らしくもあり露出度も高く全身から色気を醸し出している。魔女は人間から生気を奪う存在として恐れられている。あの魔王ともつながっていると噂されている。もっと恐ろしい外見だと考えていただけに拍子抜けしてしまった。これが本当に伝え聞いた邪悪な存在なんだろうか…

アイリーン:「あなた…よく見ると…なかなかいい男じゃない…力強さの奥に優しさを秘めている…どう？あたしと一緒にならない？そうすればもうこんなことはしないわ。」

タカ:「俺にみんなを見限ってお前の仲間になれと言うのか！」

俺はそう言いつつ魔女から目を逸らしてしまう。

アイリーン:「うふっ♥あたしは目的を果たせばいいの…約束は守るわよ。」

タカ:「お前の目的が何かわからないが、お前を倒せば解決することだ！」

俺は魔女の言葉に惑わされないよう心を奮い立たせ、伝家の宝刀“エクスカリバー”を構えると、魔女に向かって剣を振った。魔女は難なく俺の剣を交わし、魔女の服の一部が破れて宙を舞う。

アイリーン:「迷いがあるみたいね。そんな状態であなたは女のあたしを切れるの？」

タカ:「切れるさ。切らなければ俺たちの未来は暗いままだ。お前を女とは思わない。」

アイリーン:「そう…まあ、いいわ。ちょっとだけあたしの実力を見せてあげるっ♥全力で掛かってくるのね。あなたを倒して力づくであなたを手に入れるわ！」

魔女は呪文を唱え始めると頭上に雷が現れた。術者の速さと技を上げる“トールハンマー”だ。命中率が高く 2 回受けるとまず助からないだろう。あれを何とかかわせれば俺の流星剣で仕留めることができる！

アイリーン:「轟け雷よ！トールハンマー！！」



凄まじい電撃が俺に向かっている。その衝撃は遠く離れていても空気の震えを感じるようだ。急速に俺に向かってくる雷の玉。思ったよりもずっと速い。俺はトールハンマーの落下点を見極め素早くそこから距離を取る。獲物を逃したトールハンマーが地面に直撃しクレーターを発

生させる。

タカ:「お前の技の弱点は知っている！トールハンマーは威力が大きく高速だが、その動きは一直線、そして次の発動までに時間が掛かる！それさえわかっていたら…」

第2章:聖女登場

俺は態勢を立て直し反撃に転じた。“エクスカリバー”を携え再び魔女に向かっていく。

アイリーン:「よく避けたわね。褒めてあげるわっ♥でも連続発動できない訳じゃないのよ。これまでの相手はそうする必要がなかったってだけのこと！さあ、次は逃さないわよ。トールハンマー！！」

タカ:「しまった！連続攻撃！？」

攻勢に転じていた俺は次のトールハンマーに備える準備ができていなかった…頭上の雷が一瞬で俺の目の前に現れる。ダメだ…避けられない。俺の頭の中に走馬灯が駆け巡る。



俺は魔女を討伐するために編成された王国騎士団の団長だ。ここに来るまでに多くの騎士が魔女と対峙し敗れている。ある騎士は戦う前に戦意を喪失し、ある騎士は魔女のチャームの魔法によって魔女に連れ去られたと言われている。魔女を本気にさせると、ここまで強力な魔法を使いこなすのか…

エレナ:「マジックバリア！！」

エレナが現れバリアで俺を保護してくれた。トールハンマーの威力が軽減され俺は激しく吹き飛ばされたものの重傷には至らなかった。

エレナ:「タカ！一人で行動してはダメだと言っているでしょ！」



エレナは俺とパーティを組む才色兼備の女性で、魔法は他に並ぶ者がないと言われるほどである。魔王からも一目置かれていると言われている。清らかな心を持ち、お淑やかな外見からは想像できないほど勝ち気な性格である。

アイリーン:「仲間がいたとはね…」

エレナ:「アイリーン、覚悟しなさい！」

タカ:「助かったよ！」

エレナ:「長期戦は不利だわ。一気に決めるよ！」

エレナは魔法を詠唱し始める。俺は発動までの時間を稼ぐため魔女と近接戦に臨む。あわよくばダメージを与えて動きを鈍らせようとするものの隙がない…トールハンマーだけじゃなく近接戦も強いのか…俺は劣勢を感じながらも1分ほど魔女と相対した。魔女も大技を出す余裕はないようだ。

アイリーン:「これではトールハンマーを発動することができない…」

エレナ:「準備はできた！いくよ。」

エレナは胸の前で手を組み魔力を集中させた。究極の魔法“アルテマ”が発動する。

アイリーン:「あの魔法は…」

俺はそれを見届けると魔女から離れようとした。しかし、魔女は俺の腕をつかむと素早く股間に触れてきた！俺はその意外な行動に言葉を失う。

アイリーン:「なかなかいいものを持っているじゃないっ♡」

タカ:「こんなときに何を！離せ！！」

第3章:異変の兆し

俺は魔女の手を振りほどきその場から走り出す。直後、アルテマが魔女を直撃する。背後から熱風と轟音を感じて振り返るとボロボロになったアイリーンが倒れていた。それにしてもさっきの魔女の行動は何だったんだ？俺は魔女の元に駆け寄る。

エレナ:「仕留めたようね！」

タカ:「安心しろ。魔女とは言え命までは取らない。」

アイリーン:「見事な…連携だったわね…アルテマの使い手…あの女が…現れなければ…あたしが…勝っていたのに…」

確かに…俺だけであれば魔女に勝てなかっただろう。魔女は悔しさを表情に滲ませる。エレナも魔女の元に駆けつけてきた。

タカ:「もう何も言うな。さあ、肩を貸せ！大人しくしていれば危害は加えない。」

魔女は立ち上がると左手の指で自分の股間に触れ、その指をエレナの口の中に挿入した。

エレナ:「んぐ…」

予想外の魔女の行動に意表を突かれたエレナはその指を受け入れてしまった。エレナは抵抗することなく虚ろな目となり、両腕をだらんと下ろした。すると魔女は妖艶な笑みを浮かべながら意識を失った。

タカ:「大丈夫か？エレナ。魔女のやつ、何がしたかったんだ！」

一方で焦点を失い脱力していたエレナだったが、目を開け自分のカラダを確認するように見たり触ったりしていた。エレナはいつもより楽しそうに見えた。魔女を倒したからだろうか。

エレナ:「…大丈夫よっ♡何でもないの。さあ、宿屋に戻って休みましょ！」

エレナは俺の腕に手を回すとその胸を押し当ててきた。エレナは意識していないのかもしれないが、いつものエレナよりも距離が近い気がした。

タカ:「魔女は俺が背負っていくから俺の剣を持ってくれないか。」

エレナ:「わかったわ…それにしても敵であるアイリーンを介抱するなんて優しいのねっ♡」

タカ:「殺すことはないし、聞きたいことがあるからな。」

俺は意識をなくした魔女をおんぶする。そのふくよかな胸の感触が俺の背中に当たり魔女が俺の股間を触ってきたことを思い出すと胸が少し高鳴った。

タカ:「魔女は何故俺たち人間に危害を加えるのかな…俺にはそんな悪い人には見えなくて…」

エレナ:「きっとそうしなければならない理由があるのよ…人間にはわからないでしょうけど…」

エレナは寂し気な表情となり、それ以上は何も言わなかった。

第4章:誘惑の罟

俺たちは首都エトワールから 20km ほど北東に位置する村シクサルの宿屋に戻ってきた。フロントで魔女のための部屋を追加で取りアイリーンをベッドに運んで寝かせた後、俺たちはそれぞれ自分の部屋に戻った。

タカ:「やっと魔女を倒せた。これでこの辺りは平和になるはずだ…でも何かスッキリしない。魔女の目的、そして何故俺にあんな提案してきたのか…エレナの様子も少し変だし…」

そこへエレナがドアを開けて入ってきた。

エレナ:「タカ…そばに行っていていい？何だか寂しくて…」

今までになく積極的に俺との距離を詰めてくるエレナ。いつものエレナと少し違う雰囲気だ。

タカ:「ああ、何か心配なことがあるのか？」



エレナ:「うん。お疲れさま。前線での戦い、疲れたでしょ。うつ伏せになって！あたしが癒してあげるっ♡」

エレナは俺をベッドに押し倒すとうつ伏せになるよう言い、俺に跨ると自らのおしりを俺のおしりに密着させてきた。いつものエレナじゃない！俺はそう感じつつもおしりに感じる柔らかい感触に抗えずされるがままとなった。エレナは俺の胸元に手をやり、服の前ボタンを1個ずつ外して服を脱がせ、裸となった俺の背中に優しいフェザータッチをしてきた。エレナが動くたびに俺のおしりにもエレナの弾力のあるおしりの振動が伝わってくる。全身から放たれる甘い香りは少し汗の匂いを含んでいたが、それが却って艶めかしくもあり、俺は背中とおしりから感じる快感に声を抑え昇天しないよう必死だった。あのエレナが俺のために…

エレナ:「どう気持ちいいでしょ♡あたしのテクニクは。どう？あたしと一緒に気になった？」

エレナがこんなことを言うなんて…これはエレナではない??

タカ:「エレナじゃないのか？」

俺は異変に気付くすぐさまエレナから離れようとしたが、力が入らない。

アイリーン in エレナ:「エレナよ～♡ただしカラダだけわね。魂はこのあたし、アイリーンが乗り移っていて今のこの娘はあたしのお人形さんなの♡」

タカ:「エレナをどうした？」

アイリーン in エレナ:「心配しないで…一時的にカラダを借りているだけよ。あなたがあたしの言うことを聞いてくれればすぐにでもこの娘を解放してあげるわ♡」

タカ:「俺は何をすればいい？」

アイリーン in エレナ:「元のカラダのあたしと交わって欲しいの♡そうすればあたし、元気になれるから。」

第5章:明かされた謎

俺は言葉を失った。確かにアイリーンは美人だ。でも魔女でもある。その魔女と交わるということはみんなを裏切るということになる。でも断ればアイリーンは永久にエレナに憑依し続けるかもしれない。エレナが敵に回ってしまえば、俺たちは大きな戦力ダウンとなる。何よりエレナの魂をこのままにしておくことはできない。魔女が元気になり復活したとしても、再び俺たちに害をなすように俺は思えなかった。もしそうなった場合は、また捕えれば良い。俺は魔女の願いを聞き入れることにした。

俺はエレナになっているアイリーンと共にアイリーンがいる部屋に入った。アイリーンは自らのエレナのしっとりとした股間に指を入れ濡らすと、その指をアイリーンの元のカラダの口に含ませた。エレナの意識がなくなり、アイリーンのカラダに覆いかぶさると、代わりにアイリーンの

カラダが目を覚ます。エレナはまだ意識がないが大丈夫なようだ。俺はエレナをおんぶし、エレナの部屋に運び寝かせた。俺は再びアイリーンの部屋の前に行くと中に入っていいか声を掛け、その答えを待って入室した。

アイリーンはベッドに仰向けになってくつろぎ俺を待っていた。アイリーンは先ほど対峙したような感じはなく、純真無垢な女性となっていた。そんな無垢な表情を見せるアイリーンに俺は聞かずにはいられなかった。

タカ:「アイリーン…エレナのカラダから出てくれてありがとう。あのままエレナのカラダを乗っ取り続けることもできたはずだ。俺はお前が悪い奴だとは思えない。何故、俺たち人間に危害を加えるんだ…」

アイリーン:「…そうね…エレナに乗り移ったのはあなたに近づくため…あたしたち魔女はね、人間から生気をもらわないと生きていけないの…そしてあなた一人がいれば他の人間から生気をもらわなくても生きていけると思ったのよ。」

アイリーンは哀しそうな眼をしている。俺たち人間も他の動植物の命をもらって生きている。魔女にとって俺たち人間はそんな対象なんだろう。

タカ:「そうだったのか…俺たち人間は闇雲にお前たち魔女を敵視していた。さっきは知らなかったとは言えすまなかった…」



アイリーン:「タカ…だったね。あたしの言うことを信じてくれるの？」

タカ:「嘘を言っているようには思えなくてな。他の魔女もお前と同じで生きるために俺たち人間から生気を奪っているのか？」

第6章:換魂の儀

何とか魔女たちと共に歩む道はないのだろうか…俺はアイリーンの首に手を回しゆっくりとその顔を引き寄せその顔を見つめる。

アイリーン:「快樂で生気を奪っている者もいたけど、ほとんどあなた方人間に倒されたわ…」

タカ:「アイリーン…俺はお前の力になってあげたい…だけど…」

アイリーン:「タカ、あなたは強だけじゃなく優しいね。あたしたちを想っていてくれてるなんて…だけど…そうだよな。魔女であるあたしと一緒にいるなんてできないよね…」

俺は傷ついたアイリーンの肌に触れた。

タカ:「痛むか？」

アイリーン:「いえ…」

その顔は強がっているようにも見えた。今俺ができることはアイリーンに生気を与えることだ。

タカ:「アイリーン、受け取ってくれ、俺の生気を！」

俺はアイリーンの顔に触れると両手で顔を抑え口づけを交わした。甘い匂いが俺の喉と鼻に届く。アイリーンも積極的に俺の舌に自らの舌を絡ませている。俺の生気がアイリーンに流入する。

アイリーン:「ありがとう。十分いただいたわ。もう、大丈夫よ。これ以上はあなたの命が…」

俺はアイリーンをベッドに寝かせるとその服を脱がせ、その白い肌を優しくなぞっていった。

アイリーン:「ん…あ…ああ…」

タカ:「こうしてみると俺たちと同じだな。綺麗だよ、アイリーン。」

アイリーン:「ああ…ん…嬉しいっ♡」

俺はアイリーンの全身を愛撫した。喘ぎ続けるアイリーンを俺は愛おしく想っていると、アイリーンも俺のおちん〇んを手にとった。

アイリーン:「思った通り立派なおちん〇ん…あたしの中に入るかしら…」

俺はそのアイリーンの言動に興奮し胸が高鳴った。俺はアイリーンの股間に指を入れるとゆっくりと出し入れした。指の動きに合わせて感じてくれるアイリーン。俺はアイリーンのすべてが欲しくなり、そして思わずアイリーンの中に入れていた指を舐めてしまった…

アイリーン:「あ…それをしちゃうとあたしはあなたのナカに…」

俺はアイリーンの言葉の意味がわからなかったが、アイリーンは途中まで言い掛けて突然意識を失った。

タカ:「アイリーン! どうした? アイリーン!」

俺はアイリーンを呼び続けたが反応は全くなく、そのうち俺も異変を感じた。俺の中に何かが入ってくる。俺はそれが何だかわからないまま意識を失った。

第7章:交差する想い

再び目を覚ますと宿屋の天井が見えた。と同時に何か上に乗られているような重量感と口の中に違和感があった。俺がカラダを起こすと、俺の上の肉体をどかし、ベッドの向かいにあった椅子に座った。ベッドの上に座っていたのは俺だった!



タカ:「気づいたようねっ♥ その蒼い瞳、タカだよ。あたしのカラダへようこそ♥」

??:「碧の瞳で微笑む俺のカラダに入っているのは…アイリーンなのか?」

アイリーン in タカ:「ええ…あたしよ、カラダはあなたのものだけど今の持ち主はあたし、アイリーンよ。そしてタカ、あなたはあたし、アイリーンになっているの。あたしたち魔女はね、自分の愛液を相手のカラダに注ぎ込むことで、そのカラダに乗り移ることができるの。」

俺はアイリーンの肉体にいることを気にせず足を広げて不安な表情をしていた。

タカ in アイリーン:「俺がアイリーンになってる…エレナに掛けたのと同じ魔法なのか？」

アイリーン in タカ:「そうね…魔法とはちょっと違って体質かしら。エレナのときはあたしのものを一方的に入れるだけだったから憑依だったけど、今のあたしとあなたはお互いのものを入れ合ったから入れ替わっているのよ。」

アイリーンは俺を部屋の鏡台の前に連れて行き、椅子に座らせた。ふわっと舞い上がる美しい碧の髪と弾力のある胸を体感し、目の前の鏡を見ると、不安そうなアイリーンが椅子に脚を広げて座っていた。

タカ in アイリーン:「アイリーン…」

アイリーン in タカ:「そうよ…あなたはあたし、アイリーン…」

タカ in アイリーン:「俺がアイリーンの愛液を口に含んだからアイリーンが俺に乗り移ったのはわかったけど、俺はなんでアイリーンのカラダに乗り移ってるんだ…」

アイリーン in タカ:「あなたが意識を失った後、あたしはあなたのカラダに乗り移ったでしょ。でもこのままだとエレナと同じくあなたの魂は抑えられたままだから、あたしのカラダに入ってもらおうことにしたのっ♡」



俺は口の中に感じた違和感の謎が解けた気がした。つまり俺のカラダからアイリーンが自分で出した愛液をアイリーンの、今の俺の口の中に入れたのか…

アイリーン in タカ:「タカ、まさかあなたがあたしの愛液を欲しているとは思わなかったから…」

第8章:交錯する想い

そうだ…元はと言えば俺から…俺は恥ずかしさに目を背ける。

突然、部屋のドアが開きエレナが入って来た！

エレナ:「目を覚ましてタカの部屋にいないから、ここに来てみたら…まさか魔女とエッチしてるなんて！」

タカ in アイリーン:「エレナ、いやまだそこまでは…」

俺は思わずそう言ってしまった。

エレナ:「何を言っているの？まだって…これからそのつもりだったってことでしょ！」

アイリーン in タカ:「違うのよ！エレナ！あたしがお願いしたの！」

アイリーンも思わず自分がタカの肉体に乗り移っていることを忘れてそう言ってしまった。

エレナ:「タカ！あなたがアイリーンを誘ったの？彼女を助けたのはこういうことがしたかったからなのね…」

タカ in アイリーン:「エレナ、聞いてくれ！アイリーンは…悪い魔女ではなかったんだ！」

エレナ:「あんなことをして無実だと言うの？何を言っているのかわからない！」

アイリーン in タカ:「あのね…エレナ、あたしとタカはカラダが入れ替わっているのよ。」

俺たちはエレナの誤解を解こうと必死で弁明するが、自分がアイリーンに乗り移られていた自覚がないため、話が通じない…

エレナ:「タカ！この女の…アイリーンの真似をしてまで嘘をつくの？もういいわ！」

エレナは俺たちの言うことに耳を傾けずに部屋を飛び出して行った。

タカ in アイリーン:「すまない、アイリーン…俺がお前のカラダの虜にならなければ、俺とお前は入れ替わることもなかったのに…」

アイリーン in タカ:「あたしの方こそ、あなたの優しさに甘えてあなたに迷惑をかけたわ…」

タカ in アイリーン:「エレナはああなってしまっってはしばらくは口も聞いてくれない。明日、俺はアイリーンとしてエレナと話してみたいと思う。アイリーン、明日までカラダを貸してくれないか？」

アイリーン in タカ:「あたしはいいけど…あたしのカラダでいいの？元のあなたのカラダの方が…」

俺は首を振った。

タカ in アイリーン:「俺は魔女が人間と共生できる道を作りたい。アイリーンとなった今の俺なら、お前の境遇が良くわかる。俺からの生气だけではやっぱり足りなかったんだな。もっと欲しいところを我慢して辛かったのが良くわかる。だからここは俺に任せてくれ。」

アイリーン in タカ:「タカ…うん…それなら、今度はあたしがあなたに生气をあげるわ♥♥受け取ってあなたの、いえ、あたしの愛を…」

今度はアイリーンが俺の顔に触れると両手で顔を抑え口づけを交わした。男の匂いが俺の喉と鼻に届く。俺も積極的にアイリーンの舌に自らの舌を絡ませる。アイリーンの生气が俺のナカに流入する。

タカ in アイリーン:「ああ…アイリーン…ありがとう…」

今回は魔女と騎士のお話です。騎士は魔女を倒すために魔女と対峙しますが、その姿と振る舞いを見て、本当に自分のしようとしていることが正しいか疑問を持ち始めます。立場を変えてみると、正義と悪って全く違って見えるかもしれませんね。必要悪は許されるのかも人によって考え方が違うのかな~と思います。肉体が入れ替わることで初めて実感として分かり合えることもあるのかもしれませんね。

さて、第 2 部では魔王うじゃが登場します。魔王は最強です(笑)。そんな魔王に人間たちはどう挑むのか。タカとアイリーンは、エレナに理解してもらえるのか。人間と魔女の共生は叶うのだろうか。

6 部くらいの構成を予定しています。新米作者の意欲作にご期待ください(笑)